

## 第89回二松學舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十六年六月十二日(土)  
場所 九段校舎本館中洲記念講堂

### 雅楽レクチャーコンサート

瑞穂雅楽会主席楽師・学習院大学講師・東京芸術大学講師

三田 徳明 先生

### 瑞穂雅楽会

### 研究発表

#### 《国文学》

#### 『病牀六尺』第三十三回の構造

東京都昭島市立清泉中学校教諭 乙 幡 英 剛

正岡子規は、幼少時より能への関心は高く、晩年の『病牀六尺』(明治三十五年)においても、九回に亘り能について記している。

内容的には①狂言や歌舞伎等其他の芸術との比較 ②「能楽」の現状と問題点 ③近況報告とに分けることができるが、特に②に属する第三十三回(六月十四日)においては、「今將に衰へんとする能

楽」にまつわる「悪習慣」の存在を指摘するとともに、今後「保護」「維持して行く」ための独自の改革論を述べていることは興味深い。その一方で、現在の能楽史においては、明治三十年代はむしろ隆盛期にあり、子規の指摘とは食い違いがあること、子規の能に関する情報の入手経路など不明確な点もある。

そこで本発表においては松田存氏らの先行研究をふまえ、①第三十三回の構成 ②子規の能楽の認識とその背景 ③雑誌『能楽』及び「同郷の先輩」池内信嘉との関係を通し、第三十三回の構造を考察する。

そこには、能を日本古来の芸術として改めて評価しようとすると同時に、病床にありながらも新聞『日本』の記者として自らの考えを社会に向けて発信しようとする子規の姿が見られるのである。

#### 川端康成「日本人アンナ」論

博士前期課程二年 館 健 一

川端康成「日本人アンナ」は、昭和四年三月九日「東京朝日新聞」紙上に発表された。高校生の〈彼〉と、〈革命に追われた漂泊のロシア貴族の孤児〉という〈アンナ〉との交流を描いた掌編小説である。

本発表では、まず本文を一行空きの部位で五つの小段に区切り、それを一・二段と三・四段の都合三部に分ける。次に、内容を順に追いながら〈彼〉の〈アンナ〉に対する気持ちの変遷に着目する。その中で、〈蝙蝠〉〈矢守〉〈犬〉〈鳥〉といった動物の比喩表現が〈彼〉と会話が成立しない他者を表す場合に用いられるが、第五段では〈彼〉と言葉を交わした〈少年〉には用いられていない。これは〈彼〉と他者との動的距離を表すと同時に、心的距離をも表しているものである。以上の視点から、第五段落での〈彼〉のつぶやきの中に、「日本人アンナ」という言葉の感慨を見る。

## 《中国学》

### 進鴻溪の詩風と思想に就いて

——『鴻溪遺稿』の詩文を中心として——

博士前期課程二年 菊地 誠 一

進鴻溪（一八二二〔文政四〕—一八八四〔明治十七〕年、諱は漸、字を于達、幼名は和作、長じてからは昌一郎と称す。鴻溪はその号、他に鼓山・祥山・歸雲とも号し、晩年は祥山が通称）は、山田方谷門下で、本学の創立者三島中洲とも同門であり、本年が没後一百二十年にあたる人物である。

鴻溪の一生は、幕末維新の動乱に際して藩の内外に奔走していた時期を境として、その前後を師の方谷や同門の中洲と同じく「教育」

に従事していた。中洲は、鴻溪の風格について「温和にして勤飭、善く人と交はる。躬肥へて腹はり、豪飲數斗なるも亂れず。酔へば則ち笑聲四隣に徹す」（『墓碑銘』）と記し、学問について「學は朱王を奉じ、詩文を善くす」（前同）と表現し、方谷門下での位置を「方谷之を啓き、鴻溪之を紹ぐ」（前同）と顕彰した。

本発表では、鴻溪の一生について素描した上で、詩風と思想一般について考察すべく、進鴻溪の遺書である『鴻溪遺稿』を中心に扱う。また、思想一般においては、鴻溪の心学的傾向についても言及してみたい。